一冊の本・一篇の論文 ⑪

新説　破天荒

斉藤国治

「時は 1900 年，即ち 19 世紀が茲に尽き，20世紀が之から始まろうという年（明治33年）の11月5日，米国から英国へ行く定期船ポーロ号が大西洋の波の上で旭日の出るのを迎えた……旭日は紅く大きく靄に包まれ，肉眼で見ても眩しくない．このとき船橋の上に立って，東の空を双眼鏡で眺めていた船長は，何か合点の行かぬ一物を認めた……」

これは明治大正を通じて，その独特の文章で読者を魅了した黒岩涙香（1862—1920）訳述するところの新聞小説「新説破天荒」の冒頭の一節である．黒岩涙香といえば，小説「噫(ああ)無情」や「巌窟王」の紹介者でありその題名の名附親であるときけば知らぬ人はなかろう．

さて，船長の認めたこの合点の行かぬ一物とは，一種の空中飛行船であった．「船体の長さ凡そ20間(36m)，深さ3間，幅5間，総体が白く黄色いように光る金属で丸く平たくでき，前後の両端がとがっている．殊に前端は堅い物を突き砕くための用意か，槍のようにまた水雷の頭のようになり，後端には組合わせた2個の推進機がついている．それに船の甲板にあたる辺が凡そ 10 間ほどガラスの円天井になり，空をも四方をも見透せる仕組みである……」

この空想科学小説では，飛行船の動力は，万有引力の理論を解決して，引力から斥力を分離し両者を自由に使い分けるのだという．さらにこの空中船の使用目的は，月世界をはじめ太陽系の惑星を探訪するにあり，船名も「アストロノフ(訳して星天丸)」という．要するに，これは今で言うところの SF の古典であったワケ．

×　　×　　×

大正 14 年（1925）の夏，わたしは東京市下谷区（現在台東区）黒門尋常小学校の第5学年に在学していた．当時本所区（現在墨田区）のある小学校の校長を勤めていた父が，どういう機会でだか忘れたが，この翻訳小説の単行本一冊をわたしに与えて読んで見ろという．当時小中学校の教育方針としては，小中学生が一般に小説類を読むことを好まなかったから，この父の勧めは普通ではなかったと思う．ところでわたしは忽ちにしてこの本の捕虜となり，小説中に展開される筋書きとともにボーデの法則や小惑星セレスの発見物語や火星運河説など，興味深々たる天文学への目がひらけた．そして幼いながらも天文学者たるべく夢見るに至った．長ずるに及んで東大天文学科を卒業し，東京天文台に奉職して今日に至ったのだから，小説「破天荒」はわたしにとって，まさに「一冊の本」であったにちがいない．

父はすでに 29 年前に歿したが，「破天荒」の一冊はいまもわたしの本棚の隅に納っている．製本も大分崩れているが，いま改めて取出して奥付を見ると，明治43年2月印刷，爾後絶版中のところ大正10年6月縮刷再版とある．著訳者は黒岩周六(涙香の本名)，発行元は東京市京橋区北槇町12扶桑社とある．タテ 17 cm，ヨコ 10 cm のポケットサイズ，本文 410 ページ，巻末に 25 cm 大の月面図一葉がついて，定価2円とある．

×　　×　　×

さて，星天丸の動力の発明者はアメリカの仁礼博士という物理学者であったが星天丸を建造する費用がない．そこでイギリスの柳河卿という青年貴族でかつ科学者が資力を出し，実地建造を引受けることになった，その際両者の間でつぎの約束が交された．第一，星天丸は戦争には使わぬこと．第二，星天丸完成の暁には卿は博士の愛嬢を妻として申し受けること．そこで柳河卿は寝食を忘れて星天丸建造に没頭し，そのため仁礼嬢との交際も怠かになった．そのうち仁礼博士は世を去り，残された嬢は久しく便りをよこさぬ柳河卿の愛情を疑い，また周囲の人の勧めもあって別のイギリス貴族との婚約を承知してしまった．定期船ポーロ号は結婚のためイギリスへ向う仁礼嬢を乗せていたのである．一方，風の便りにこれを知った卿はやっと出来上った星天丸を駆ってポーロ号を大西洋上に迎えたわけである．

卿は船長とも顔見知りであったので，気安くその許可を得て仁礼嬢と附添夫人とを星天丸の船内見学に誘い，移乗が終るや斥力計の針を動かしたので，星天丸は忽ちにして空中高く跳上った．昔，韃靼人は気に入った女を見つけると馬でさらって自分の天幕まで連れこめば妻にできたというが，これは正に近代的掠奪結婚である．もっともそのときすでに嬢の心は柳河卿の方へ移っていたのだが．かくて数時間の内に嬢らをニューヨークまで拉しきたり，一週間のうちには両人は正式の結婚式を挙げるというスピード振り．披露宴には米大統領夫妻も招かれた．かくて新夫妻はさらに一週間ののち新婚旅行を兼

ねてまず月世界探険に出発することになる．

大気圏を抜けるに従い速力を増し，24時間にして月面到達というから米・ソのアポロやルーナよりも速い．途中無重量状態を経験する．このあたりから母なる地球を振返っているが，「地球は青かった」とは残念ながら言っていない．星天丸は月面上チコ山（訳して隊長山）その他を詳しく調べ月の裏側をも回わったのち，つぎは飛行11日を費して火星を訪問する．ここでは火星人の空中艦隊の攻撃を受け，これを撃退したのち早々にして金星へ向う．金星では雲海の下に天人天女の善美の世界があった．金星人は鳥から進化したと見えて，翼を具えて空中を飛翔し美しい声で歌う．（金星は大気が地球より濃いから鳥類の進化に適していたとは理屈に合う．）さて金星人との優雅な交際ののち，つぎは木星へ長駆する．途中で夫人は水星軌道内を巡るという惑星ボルカンの日面通過を認める．また小惑星エロス（1898年発見）に遭いその上で一時駐船したりしている．

木星ではまず最大の衛星ガニメードに到着．ここにもガニメード人の都市国家があり，柳河卿らは歓待される．ガニメード人は科学において地球人より格段に優れ，ラジウム光線（地球では 1898 年発見）など自由に活用している．彼らは言葉の代りに，ジェスチャーや幾何図形を使うので意志疏通に困難はない．この星は空気と水と日射が少ないので，都市全体を大きなガラス(？)張り温室内につくり，完全な空気調節の生活をしている．しかし空気貯蔵の方法が見付からないので宇宙旅行が実現しないのだという．この世界では空気が余りにも貴重なので空気に関する発明研究が進まないのだ（とは話が苦しい）．将来，地球にあり余る空気とガニメードの地下資源とを交換貿易しようとの話もでる．柳河卿はガニメード人らを乗せて木星の見物に誘うが，彼らは何故か恐怖の色を顔に浮かべ，「いまは駄目だが約一週間後なら」という．待つほどにその日になって星天丸は彼らを乗せて出発し，6時間にして木星雲海を抜け木星表面に 2000 マイルまで近づいた．木星表面の噴火やとけた岩石の海の壮観に一同感嘆の声をあげる．しかし気がついた時，星天丸は木星引力に強く引寄せられていて，斥力計をフルに働かしても船は落下をつづけるばかりである．柳河卿らは青くなって，神の秘境に深入りしすぎた罰かと恐れ悲しんだが，そのとき同乗のガニメード人がニコニコしながら近づいてきて，船は上昇をはじめたことを示す．彼の差出した図面には，木星と星天丸を描き，その上にガニメードをはじめ5個の衛星を一直線に描いてある．(1900 年当時木星衛星はガリレオの4衛星と 1892 年発見のバーナードだけが知られていた．)衛星が協力して星天丸を上方へ引張り木星引力から脱出させている意らしい．彼らは星天丸の動力の限界を知っていて，5衛星の「合」の時期まで待っていたのである．（実をいうと，5衛星の上向き引力の合計は木星引力の 2/1000 000 だから，5衛星の加勢で星天丸を救出させることは難しいのだが．）柳河卿はさらに他の惑星をも訪問したかったが，ここに到って星天丸の限界を知り地球に立戻ることにした．多量の貴金属を土産にもらって故国のロンドン市に帰着したのは，地球出発以来ちょうど 80 日目であったという．（略算すると星天丸の宇宙間平均速度は 300 km/s になる．）

× × ×

以上が「破天荒」の荒筋である．涙香訳とあるから原作があるはずで，始めてこの本を読んだ 12 歳の時から原作を知りたかった．最近この本の再版が出て，その解説（伊藤秀雄氏による）から原作者は英国の作家ジョージ・グリフィスで，原作名は「空中新婚旅行」であることを知った．

涙香の「破天荒」は，東北大の松隈健彦先生（1890-1950）もこれを読んで天文学徒たるべく決心したと何かに書いておられた．涙香の五男黒岩五郎氏は東大天文学科出身で小生の2年後輩である．だからこの本は今から40～50 年前に少くとも3人の少年をして専門の天文家たるべく志さしめたことになる．この小文を執筆するに当たり，一夕黒岩五郎氏を東京新宿に誘い出して，ビールを傾けながら懐旧談に花を咲かせたのであった．

（東京天文台）

掲　示　板

IAU シンポジウム

次に記すようなシンポジウムが予定されております．

No. 56 "The Fine Structure of the Chromosphere"

オーストラリア，クウィーンズランド，サーファーズ・パラダイス

1973 年9月 3～7 日

No. 57 "Coronal Disturbances"

オーストラリア，クウィーンズランド，サーファーズ・パラダイス

1973 年9月 7～11 日

No. 58 "Formation and Dynamics of Galaxies"

オーストラリア，キャンベラ

1973 年8月 13～15 日

No. 59 "Stellar Instability and Evolution"